# 一人ひとりを大切にする具体的な保育

7

## インクルーシブな保育とわらべうた

ユリア
愛知県碧南市・へきなん保育園園長

前回は、「とても上手だったから、ご褒美にリレーやろうか」といった言葉掛けだけで、子どもは考えて次の行動ができて驚いたと述べました。このことは一つの例にすぎません。日々、こうした場面が積み重なっているのです。

その場の言葉だけ変えてもそうはいかないかもしれません。変えないよりはいいですが、どうしたら子どもたちが話をよく聞いて考え、行動できるかといえば、やはり日常の中で、保育士が子どもをよく見て、話をよく聞くからだと思います。その子その子を尊重する会話を続けているからだと思います。

### 1 インクルーシブな保育の具体例

園庭に小さな川が流れているのですが、その水に、外のテラスで遊ぶための木の積み木を濡らして遊んでいる子（4歳4か月）がいました。私でしたら「積み木は濡らさないで」といってしまうところですが、保育士が「何しているの？」と尋ねました。するとその子は、「チョコレートケーキを作ってる」と答えました。

私はその話を聞いて、「ああ、確かにね」と思いました。積み木は濡れて色が濃くなり、チョコレート色になります。

やがてだんだん乾いていった時、子どもが「あれ！先生、色が変わってる」と大発見をしたようにいいました。保育士が「触ってごらん、ここもう濡れてないね」と答えると、その子は「じゃあ、もう1回濡らして、チョコレートケーキにしたい」といって、また濡らして遊んでいました。

こうしたやりとりが、子どもに寄り添うということではないでしょうか。

実は、木が水に濡れて色が変わることを見つけたこの子はかなり発達に特徴のある子で、発表会で行う劇の練習をしている時などは、いつも自分の好きな動きを楽しそうにして、時には舞台からも飛び出してしまうような日常をすごしています。そして、この子につられて3人ぐらいは毎日お祭り騒ぎといった様子になっていました。

そんな中でも他の子はしっかりとした日常をすごしつつ、それぞれの遊びや様々な活動に集中しているのですが、一人ひとりを大切にする具体的な保育を実践する時には、やはり結果として、インクルーシブな保育（お互いの存在を認め合い、ともに育ち合うこと）と重なってくるようです。

### 2 専門家の助けを借りる

そうはいっても、約20人のクラスに、2、3人特徴のある子がいて、またその子たちにつられて盛りあがってしまう子がいる状況の中で、一人ひとりを大切にすることは、なかなか悩むことが多いことも現実です。前にも述べたように、私の園の現在の人員配置は、3、4歳児は混合保育で、合わせて20人前後を担任2人で保育しています。3、4歳クラスは合計4クラスあります。

●大型積み木の遊び

5歳児は5歳児のみの保育で、今年は18人と17人の2クラス、担任は各1人です。5歳児クラスの加配対象の子は前回も述べましたが、著しい発達を見せてくれています。やはり、一人ひとりに寄り沿った結果だと思います。

一人ひとりに寄り添う課程で、もう1つ必要なことがあります。それは、作業療法士の先生などと連携し、発達に課題のある子の発達をより丁寧に理解することです。

まず、その子を「よく見る」ということですが、よく見るだけでは理解が難しいことがとてもたくさんあります。なにしろ、その子その子の発達の特徴はまさに一人ひとり異なっており、また専門の知識がないとわからないような、思いもよらない特徴を持っているのです。

例えば、視覚の情報を得ることは優位なのですが、自分自身の行為が認識できないとか、シャワーの水が当たることが、その子には剣山で刺されているほどに感じているなど。こうしたことは、やはりその道の専門家の助けを借りなければ理解しがたいことです。こうした連携がなければ、インクルーシブな保育において、一人ひとりを大切にする具体的な保育を実践することが難しいと思います。

私の園のある愛知県碧南市では、市内各園を作業療法士、言語聴覚士などの先生が年に何回か巡廻するシステムなどがあります。それによって、保育士はより保育に対する専門性を高めつつ、日々基本的に丁寧な保育を実践しています。

その結果として、著しい発達を見せてくれていると思っています。もちろん、子どもたち自身がそうした力を持っているということに他ならないのです。

## 3 普通と思っている枠を広げよう

どうしても、「発達に課題がある」などと表現してしまう保育現場の課題があると思われます。つまり、そうした振れ幅の大きい個性こそが、これから進んでいくであろう予測不能な社会にとって、とても大事な人材になりえるのではないかと思うのです。現場の保育士が、どうしたらよいのかと考える中でも、自分たちの考える「今まで普通はこうと思っていた枠」をもっと広げる必要があるのではないかと思います。

私は、園の保育士には「普通と思っている枠を広げよう」と伝えています。しかし、そのことを実際の保育の中で実践する時、やはりそれぞれの子がどんなことに興味を持っているのか、どんな遊びをしているのか、保育していくうえで、特に集団で行う保育を求める時、上手くいかずに困ったと思いがちな保育士の姿を目にします。

しかしよく見ると、特別な特徴のある子どもたちは、とてもユニークな感性を持っていたり、創造的な遊びをしていることが多いように思います。そうした子どもたちの個性を理解しつつ遊びを守り、さらに発展するような手助けができたならば、素晴らしいことだと思います。少なくとも、そうした創造性をつぶさないように気をつけていきたいものです。

特徴を持った子どもたちへのかかわりについて述べてきましたが、そうではない子

どもたちに対しても、当然同じことがいえます。つまり、一人ひとりを大切にする具体的な保育の実践をする時、そこにいる子ども全員が含まれています。

## 4 発表会のこと

私の園では、毎年12月の初旬に発表会を行い、保護者の皆さんにも子どもたちの成長を見ていただいています。

どこの園でも行われているような、一般的な発表会だと思います。以前にも述べたように、3歳未満児は参加しません。3歳以上児がクラスごとに、創作劇の中にうたもわらべうたも、楽器の演奏も盛り込んで発表しています。

一人ひとりを大切にする具体的な保育に取り組む中で、どういったことを発表したらいいのだろうかと考えながら取り組んでいます。あたりまえのことで、皆さんも当然そうしているという声が聞こえてきそうですね。

私の園では、以前は年長児が全員そろってピアニカなどが弾けるようになどと保育士も子どもたちも頑張っていましたが、「全員が同じことをしなくてもよくない？」「得意な子が、得意な楽器演奏すればいいかな？」というように考えて、それはやめることにしました。やめることがよいということではなく、私の園ではそうすることを選んだということです。

●室内での課業（5歳児）

## 5 保育室内での音の環境

その過程で、ピアニカを弾くこと自体を園で行うこともやめることにしました。このことは、自由に遊んでいる時にピアニカを自由に弾いてよいことにしていたら、園の隣に住んでいらっしゃる方から夜勤明けで、その音が響いて眠れないとの苦情をいただいたことによります。

私たちは、ピアニカを弾くことを考えるきっかけをいただいて、「どうなんだろうね」と職員会で話し合いをしました。

それまでは、何曲も年長児のほぼ全員が弾けるようになって卒園していったものです。しかし、確かに音が大きくて、少し頭に響くといったことがありました。また、学校でも習うけれど、どの程度やるのだろうかといった話になり、小学校入学後に少し助けになるといった考えはどちらでもいいのではないかと考えました。

さらにもう一つ、保育室内での音の環境を考えた時に、練習する過程ではあまり美しい、落ち着いた音というわけではないかもしれない、といった声もあげられ、職員みんなで考えました。

そしてその結果として、園でピアニカに取り組むことはやめることにしました。ただ、美しい音に触れたり、楽器に自由に触れる機会はぜひ整えたいと考えました。そこで考えついたのが、誰がどの音（鍵盤）を叩いてもきれいな音の出るグロッケンでした。そして、いつでも演奏できるように準備しました。

そうしたら、子どもたちは日常的に演奏を楽しみ、好きな曲はいつの間にか演奏ができてしまうという状況になっています。バチの持ち方や音の出し方は、保育者がその都度声を掛けていると思います。

●① 園庭の小川での遊び
② 園庭全体での遊び（冬芝）

①

## 6 わらべうたのこと

発表会の中で、たくさんの「わらべうた」を歌います。日常の中で取り組んたそのままを発表に取り入れて楽しんでいます。劇の中で「一緒に遊ぼう」というと、それがみんなわらべうたになってしまって、少し違和感を感じるのですが、それはこれから工夫していくことと思っています。

私は、わらべうたの専門家ではないのですが、ここでは、なぜわらべうたを保育の中に取り入れているのか、実践の中で考えた意味を述べてみたいと思います。

まず、拍をとるということ。歌う時に拍を意識して歌う、これが基礎になります。

乳児に向けて歌う時は、その子の呼吸に合わせて歌う、みんなに向けて歌うのではなく、目の前の一人に向けて歌うことを大事にします。すると、よく聞くということが身につきます。拍が刻めてリズムがとれるということは、言葉の発達にもつながります。大人がきれいな声で自分のために歌ってくれることは心の安定、心地よさを感じることにもつながります。

幼児にとっては、役決めや役交代、またルールを理解し、勝ったり負けたりといった感情を伴う体験にもつながります。こんなことを思いながら、今は毎日の朝礼で職員もわらべうたを3曲歌っています。

まず、覚えていなければ歌うこともできませんから、1週間同じうたを歌うとして、1か月に12曲、12か月で140曲ぐらい歌うことになります。それを、ぐるぐると繰り返しています。それで、職員もだんだんと身につけていっているようです。こんなことも、限られた時間の中で保育に必要と思うことを実践する工夫の一つです。

②

●発表会